

「最終的には生活保護がある」

衆院予算委員会で1月27日、菅総理が野党議員から再度の特別定額給付金について問われ、言った言葉だ。

「自助、共助、公助」を強調する菅総理らしい雑な答弁だった。

確かに、最終的には生活保護がある。現にそれで200万人以上が命を繋いでいる。しかし、それが万全に機能しているかと言えば、疑問があるのも事実だ。

私はこれまで、生活保護を巡って様々な自治体に申し入れをしてきた。

最初に申し入れに行ったのは2012年、札幌市白石区。40代の姉妹が餓死、凍死するという悲劇を受けてのことだった。

## 万全ではない「生活保護」

た。知的障害のある妹を支えていた姉は体調悪化などで働けなくなり、生前に3度も役所を訪れていた。しかし、「若いから働ける」などと追い返され、最後に役所に行った半年後、姉妹は遺体で発見されたのだ。

15年には、埼玉県深谷市に申し入れ。親子3人が車で利根川に突っ込む一家心中事件が起きたのだ。高齢の両親は死亡、40代の長女のみが助かったのだが、一家はその数日前、生活保護申請をしていた。なぜ、「最後のセーフティネット」にひっつかれたのに事件は起きたのか。母親に対する殺人と父親に対する自殺幫助で逮捕された長女は、心中2日前、役所の職員が調査に訪れた際のことを、裁判で以下のように語っ

ている。

「役所の調査であまりにも惨めな気持ちになったので、早く死のうと思いました」

同年の年末には、東京都立川市で生活保護を利用していた男性が自殺。自殺前日、男性のもとには生活保護の廃止を告げる通知が市から届いていた。廃止理由は「就労指導違反」。「働けと指導したのに働かなかった」ということだが、生前の男性にはうつ症状がみられたという証言もあり、働ける状態だったのか疑問だ。そんな男性のもとに一方的に届けられた「廃止」の通知。この問題に関しては「立川市生活保護廃止自殺事件調査団」が結成された。

ここまで見てきてわかるように、「最終的

には生活保護」といっても、申請するまでに高いハードルがあり、無事に利用できたとしても突然打ち切られることもある。

07年、北九州市では生活保護を廃止させられた男性が「オニギリ食べたい」という言葉を残して餓死したが、そのような悲劇がまかり通るのがこの国の「公助」の一面である。また、生活保護を申請すると親族に連絡がいく「扶養照会」も大きな壁となっている。

ここまで読んで、「最終的には生活保護」という言葉の乱暴さがよくわかったと思う。菅総理は、公助をマトモに機能させ、そして「一人も困窮で死なせない」というメッセージを何度でも発してほしい。

### 今月

#### 気になっていること

大阪府八尾市で昨年2月、生活保護を利用していた母親(54歳)と長男(24歳)が餓死した状態で発見された事件。これについても取材したいと思っています。



(左の写真) デモクラシータイムスに出演。YouTubeで観られます。(右) 都のTOKYOチャレンジネットに申し入れた時のもの。